

『グローバル天理』第5号（通巻17号）掲載論文要旨

井上昭夫 巻頭言 「黄砂と環境破壊」

中国大陸から飛来する黄砂の量が、今年はとくにきわ立っていた。一般に、石炭灰や酸性雨と混ざって降り注ぐ黄砂は、土壌や植物や河川にも害を及ぼし、中国大陸ばかりではなく、日本においても環境破壊の原因になっているのではと考えられがちである。しかし黄砂は、マグネシウム、カルシウム、リンなどを含んでいるため、栄養源が乏しい海域では植物プランクトンの重要な栄養源にもなる。空中で強いアルカリ性の黄砂が働いて、酸性雨を中和する働きをするとも言われている。自然の黄砂は善でもあり悪でもあった。

荒川善廣 「「元の理」の探究（2） 魂について [1]」

「元の理」を哲学的に解釈するに当たって、まず魂の問題を検討しなければならない。なぜなら、泥海中に見いだされる水棲動物は魂の象徴であり、人間姿を以てこの世に現れることのできる存在だが、根源神である親神自身はそのような存在ではないからである。伝統的な西洋哲学における魂のとらえ方を批判的に検討した上で、天理教の教義学が導入すべき魂の定義とは、「人間経験のあらゆる機会 (occasions) を受容しそれ自身の統一へともたらず場所 (locus)」ということである。

北詰洋一 「紛争回避のテクノロジー（2） 「難民天国」は意外に厳しい試練の場」

今回は前回に続いて難民問題を取り上げる。難民あるいは亡命希望者が世界で最も希望するのは「移民の国」米国で、ここに毎年多くのそうした人々が押し寄せるが、「難民天国」であるはずのこの国に入ることは、実は容易ではない。どんな人間が入国してくるか分からないから、入国に際し厳しい審査が行われる。収容施設も限度がある。そしてその一部として、刑務所が利用されていたのが UNHCR や支援団体の調査で分かってきた。犯罪者と同居させられるわけである。米国に悪意があつてそうになっているとは思えないが、難民問題は思わぬところで「副産物」を生んでいる。

末延岑生 「ことばと教育（1） ことばの元を探る [1]」

文字の発生はせいぜい3 - 4000年くらい前までに限定されるため、文字だけから人類の誕生以来の500万年という長期にわたる言語の起源と変遷をたどるには程遠い。ゆえに言語学の範

嘯だ けから言語の起源を類推することは難しいといえる。人類の言語起源に関する多くの説は、進化説 (evolution theory) と神授説 (divine theory) に分けられよう。今回は前者について検討する。まず、外界に注目した説として、imitation theory, gestural theory などがある。人間の内面に注目した説として、interjectional theory, theory of natural sounds, yohe-ho theory, theory of the priority of song などがある。

宮田 元 「宗教・スポーツ・教育 (1) スポーツと宗教 [2]」

アメリカは、宗教的な伝統をもつ国である。その伝統は、アメリカの文化基盤の形成に寄与してきている。アメリカのスポーツは、宗教と共通する多くの特徴をもち、H. Edwards は、もしアメリカに普遍的な民間宗教 (popular religion) があるとすれば、それはスポーツの制度の中に見出されるであろうと述べている。しかし、スポーツを世俗的で、準宗教的 (quasi-religious) なものと見る人が多い。その中で、究極的实在の経験 (an experience of ultimate reality) をもつものとして、スポーツが宗教に一致するとみる、C. Prebish の見解を探ってみる。

太田登・中井精一 「天理教原典とやまとことば (17) 方言資料と比較研究：『奈良県風俗誌』 [6]」

方言資料としての「奈良県風俗誌」を検証する目的から、昭和 60 年 (1985) におこなった方言調査データと「奈良県風俗誌」のデータをもとにそれぞれ分布図を作成し、比較検討を試みた。

笹田勝之 「天理教における悟りの構造について—他宗教との比較を通して— (15) 第二章「悟ること」について [3]」

「般若的空思想」は「色即是空・空即是色」であるが、これを「華嚴哲学」では「理事無礙」と呼ぶ。そして「空」または「理」は「無」ではあるが、有と分別され、有と相対する「相対無」ではなく、有無相対を超えた「絶対無」である。

堀内みどり 「天理異文化伝道 (16) 天理教のコンゴ伝道 [15] —初代会長時代 (1963-1967) [9]」

二代真柱を迎え、新築なった神殿の設立奉告祭が喜びのうちに執行された。同時に開設された診療所「憩の家」は予想を遙に上回る患者の診療に迫られ、その親切で適切な診療が評判と

なった。翌年4月の教祖誕生祭に高井らは帰参した。5月末高井はアフリカ課長として帰国するよう命じられる。

金子昭 「天理経営学—その歴史・哲学・展望 (15) 思想編 宗教と経済・経営 [9]」

近代経済学は、最小のコストで最大の効用を目指す経済的人間 homo economicus を前提として、展開している。しかし経済学のそうした人間学的前提は、根本的に間違っている。仏教経済学は、これに対して、一定の目的を最小限の手段で達成することを目指す「小欲知足」の慎みある人間観を前提とする。今日の地球環境の危機において、真に有効なのは、まさに後者の経済学である。

佐藤孝則 「生命論としてのエコロジー (4) 「クローン人間計画」の光と陰 [3]」

高等動物はクローニングによる世代交代を繰り返せば繰り返すほど、種として遺伝的柔軟性が乏しくなって絶滅に向かう。これは遺伝子の多様性を損ねるからである。1998年以降、日本の畜産研究施設から次々とクローン牛が誕生した。これによって、人間が好む牛肉の提供が随時可能となった。しかし、我々は家畜たちの命の尊厳性を認めなければならない。ただ、人間のクローニングは人権問題や社会的混乱を招く可能性もあることから、クローン問題の解決には研究者の倫理観も重要であるが、その技術を実際に利活用する一般市民にも高い倫理観も重要ではないかと考える。クローニングは、それを扱う人間側のモラルや用途に依るところが大きい。

小滝 透「天理比較神秘論への試み(17) イスラーム神秘主義—その(2)」

今回は、スーフィズムの最終目的たるファナーへの過程と、その時の精神の在り方をスケッチしてみた。また、そうした精神的状況下で繰り広げられるスーフィズムの世界観と社会秩序としてのイスラームの葛藤を述べてみた。次回は、こうしたスーフィーたちが繰り広げてきた社会的活動の後を追ってみたい。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教(17) ギリヤークニヶ崎さんの踊り」[2]

60年代後半以来一貫して路傍や公園で踊り続けてきた「大道芸」の達人として知られているギリヤークニヶ崎さんが、阪神淡路大震災のあと神戸を訪れ、被災地で踊った。しかし、死ん

でいく人間の悔しさや恨みを目の当たりにして、供養してあげようという気持ちが思い上がったものであると感じたとき、振り付けを忘れ、一瞬動きが止まり後が続かなかった。この彼の体験談から、踊りを通しての感情表現について考える。

金子珠理 「ジェンダー女性学情報（16） 社会福祉とジェンダー [1]

ジェンダーの視点に基づく社会福祉の再構築作業はそう進展しているわけではない。その理由として社会福祉の根底にある「ジェンダー・エシックス」の存在が挙げられる。社会福祉の基盤にある「一定の家族像」としての「家族倫理」(family ethics)が母子世帯にどのような影響を与えているのかを例にとり解説する。

塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信（16） イスラム教と臓器移植 [5]

臓器移植について現在技術開発が先行してしまっている感じがする。うやむやになってしまう前に人間の将来との関わりについて真剣に議論しなければならない段階であろう。

特別連載・シンポジウム「天理スポーツを語る」（5） パネルディスカッション『天理柔道とオリンピック』 [1]

本号、及び次号の2回にわたり、シンポジウム「天理スポーツを語る」の午後の部にて行われたパネルディスカッション『天理柔道とオリンピック』の内容を掲載いたします。本企画は、シドニーオリンピック柔道競技60kg級金メダリストの野村忠宏氏（ミキハウス）、同コーチの細川伸二氏（天理大学助教授）、同100kg超級銀メダリストの篠原信一氏（当時、旭化成・天理大学非常勤講師、現在、天理大学講師）、そして篠原選手を大学時代より指導されている正木嘉美氏（天理大学助教授）の天理大学出身の柔道家4名をパネリストとして招き、同じく天理大学出身の柔道家であり、同オリンピック国際審判員である藤猪省太氏（本学教授）の司会のもとに進められた。